

服装に表われた手芸的装飾について (第1報)

—— 西洋服飾文化史より ——

汐田 美智子 ト部 澄子

Study of Hand-Worked Pattern of Costume (Part 1)

by Michiko Shiota and Sumiko Urabe

It is our intention to study hand-worked pattern of costume as this has been carried on from ancient times until the present day, in the hope that new ideas from this study may be applied to modern fashion.

We therefore studied the development of such design as it occurs in Western women's costume throughout the centuries. In this first report we will investigate the development of design in the following areas:-

- 1) Egypt and Western Asia, 2) ancient Greece and Rome,
- 3) Early Christian Age and Byzantine

In Part Two of this report we wish to carry our studies on further to cover the Mediaevals and thereafter.

研 究 目 的

服装研究の一端として、服飾をとりあげ別の面から服装を考えてみた。手芸的装飾が過去および現在に至るまで服装にどのように扱われてきたか、またその変化の鍵をさぐって見たいと思い世界的に各地方の特色のあるものを特に深く掘り下げて探求し、これと並行して実際に独自の立場で創作を試みてゆきたいと考えている。

服装の問題をみつめていると、創作の前にまず現在までの歴史的過程を識る必要があり、女子西洋服飾文化史の中から服装に表われた手芸的装飾がどのようにとり入れられてきたかを考えた。はじめにまず、概略を調べ大体の姿を把握し、後に詳細に各部にわたって考察してゆきたいと考える。

従って、次のようにおのおのの時代に分け第1報では、エジプトからビザンチンまでの服飾について述べる。

- | | |
|--------------------|----------|
| 1. エジプトと西方アジア | 6. 16世紀 |
| 2. ギリシャおよびローマ | 7. 17世紀 |
| 3. 初期キリスト教時代とビザンチン | 8. 18世紀 |
| 4. 中世前期 | 9. 19世紀 |
| 5. 中世後期 | 10. 20世紀 |

本 論

1 エジプトと西方アジア (紀元前約 3000 年から 500 年まで)

歴史時代は紀元前 3000 年、ナイル河畔にはじまった。古代文化の記念建造物を多数保存しているエジプト文化は、ピラミッドや神殿に示されている装飾で風俗を知り、また洞窟の壁画などによって衣服の起源などを知ることができる。

古代の服装は、西洋、東洋の区別や男女別の意識もなく単純に布地を身体に被う様式のものであった。また人々は繊維の収集から布を織る技術を発明し、布地は主に麻と毛であり、それには染色や織文、刺繍が施してあった。織は粗いものであったが、後年になると上流の人々は下着や身体が透けてみえるような薄い布地を好んだ。

ここで刺繍について考察してみよう。有史以前の墓の発掘物の中に葬祭のために刺繍の装飾がとり入れられているものがある。そもそも刺繍のはじまりは織物の縁どりであったが針が用いられるようになってから女性の手によって布の縁は刺繍で飾られたが、そのうちに縁ばかりでなく、その布地の表面にも自由な模様を刺繍するようになった。なかでも立体的な仕上りを表わすために、サティン・ステッチ (Satin Stitch) が多く用いられた。

またレース (Lace) もすでに紀元前 1500 年～1600 年にはエジプトにおいて網状のレースが使われていた。また古代ギリシャ・ローマの人々が服のいたんだ部分に糸をかけ、ステッチを施したことが次第にレースに発達したともいわれる。

エジプトの服装は腰衣やチュニック (Tunic), ロープ (Robe), ケープとスカート (Cape and Skirt), 巻き衣や外套などが用いられた。

ヨーロッパより気候の暑いエジプトでは、服装は簡素で単純であったため、プリーツの整え方や布のまきつけ方によって縁飾りや房飾りを意匠的に施し、その上、肌が大きく露出された単純な服装には、宝石や七宝、金銀細工の首飾りや腕輪などの装身具が効果的であった。そしてその中でもショルダー・ケープ〔カラー (Collar) や首飾りともいう〕は丸味を帯びて幅が広く鮮やかな色であった。

エジプト文化が最初に栄えた古王国時代 (第3王朝～第6王朝, 紀元前約 2780 年から 2280 年まで) は腰布が用いられていたが、この服装はその後も長い間、実用的な働き着として保持された。



図1 上流婦人のチュニック
(エジプトの壁画より)



図2 ケープとスカートを着た
ネフェルチチ女王
(エジプトの壁画より
紀元前約1250年)

第二期に栄えた中王国時代 (第11王朝～第13王朝, 紀元前約 2065 年から 1660 年まで) も前の時代と同じようなものであった。しかし第三の時代に栄えた新王国時代 (第18王朝～第21王朝, 紀元前約 1580年から950年まで) には変化があり、スカートとケープがあらわれ、着物を着たという感じがでてきた。またプリーツがはじめて現われた。

エジプト人たちは、裸足で描かれており、サンダルをはいているのは王と聖職者だけであった。

図1は上流婦人のチュニックで女子のやや整った古代の服はチュニックであった。これはやや後年になってからの上流婦人のチュニックである。胴や腰などは

バイヤス布か特別の織り方の布を使用して身体になじませて美しいシルエットを出すように工夫しており、すそは膝から下を拡げている。縞柄の布地が身体を中心に垂れた飾りバンドとの調和を考えている。

図2はケープとスカートで、スカートは紐を通して作ったもので、たくさんの細かいプリーツができています。このプリーツの服は、ドレープの服にかわって、美しい線で構成され、身体をしなやかにみせ、立体感を生じた。またスカートの上にさらにせまい幅の飾帯を装っている。冠は秃鷹の冠で翼を形どったものである。これは女王のかぶりもので黄金製のものであった。



図3 エジプトのモチーフ

図3はエジプトのモチーフである。エジプトのモチーフの中で太陽はすべての神の先祖であり、翼のある太陽は、人間の生を永遠に守るものとして寺院やアクセサリーの装飾などにたくさん用いられた。スカラバエウス（甲蟲型の宝石）は不滅の象徴として胸飾りやリングに、蓮は無窮の生命のシンボルとして、またシュロやパピルスや波などを模様化したものが用いられた。これらに用いられた色は青味がかった濃緑色（ナイル・グリーン）や黄、赤、明るい青、黄褐色、黒などが多い。

古代西方アジアの文化は遊牧の民セム人がメソポタミア地方に住みついて異色ある文化を発展させた。歴史はエジプト以前よりはじまったと思われる

があまり服装は目立つものはなかった。西方アジアは、バビロニア、アッシリア、ペルシャなどの国々が栄えたが、そのうちで最も遺品が多いのはアッシリアである。しかしアッシリアのものは諸神会見とか戦士の場面や人物が多くて、女神を除いては、婦人の像はごくまれである。布地は下着用には麻、表着用には毛が主で、エジプトに比べると豊富で贅沢で金糸の織文や宝石で飾ったり、刺繍や重々しい房飾りを用いた。これらのモチーフなどは驚くほど細やかであった。房飾り



図4 アッシリアの女装

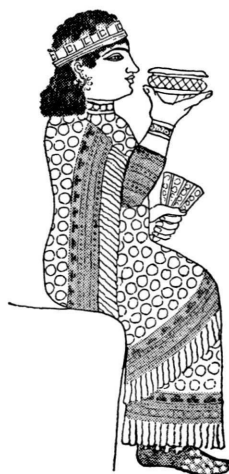


図5 アッシリアの女王

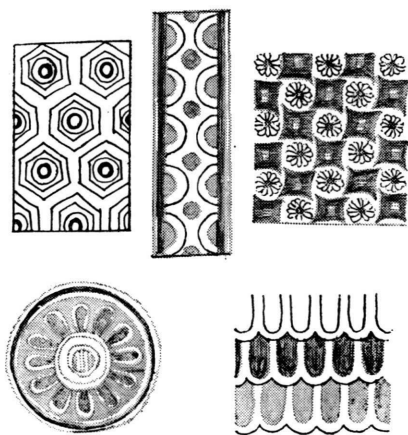


図6 アッシリアのモチーフ

の房は布のほつれを防ぐため織糸の端を結んでいたが飾りとしても十分であった。房の結び方や長さなどをいろいろと工夫して変化をつけて繊細な美を出して房に添ってあるいは布一面に色糸や宝石の刺繍が施こされていた。しかし、房飾りは原始的かつ画一的であったので織物技術（色糸の織り込みなど）や刺繍、染色法などの発達によってだんだんとすたれていった。房飾りは服の単調さを一応は補っているが、装飾に対する関心や美意識の向上により、以上のような他の技法が使われるようになった。

西方アジアの服装はさまざまで、腰衣、巻き衣、チュニックなどがあったが、父権制度は女性の服装を装飾化し、非活動的なものとしていった。

図4はアッシリアの女装で、チュニックの上に房飾りのついた巻き衣をつけている。これはあまり身分の高くない女子のものである。一層、身分の高い婦人の場合は図5のように図4よりも長い巻き衣をもうひと巻きからだに巻いた。そうすることによって、すその部分が一層はでやかになり、前よりいっそう美しい装いとなったわけである。華美な模様のついたタイトなそでのチュニックの上に巻き衣をつけている。

図6はアッシリアのモチーフである。アッシリアのモチーフは刺繍やその他の模様をみるとエジプトと共通のモチーフが交っている。蓮、翼のある太陽（その間に神の像を置くことが特徴である）円形の花形飾り、空想や実際の動物、組紐、ジグザグ模様などがあった。

2 ギリシャおよびローマ（紀元前700年から150年までおよび紀元前700から西暦476年まで）

古代ギリシャの文化は秩序的で単純、明朗かつ健康的で人間性が強調され、芸術や美をはじめて意識したものであった。従ってギリシャの服装は簡素な中に調和美のあるもので東洋諸国のように権力を表わしたり宗教的な標としての装飾とは異っていた。その美は、服装そのものではなく、人間の身体そのものの美しさや動作の美しさを布の柔軟性やドレープによって布地をとおしてみた。

ギリシャの服装は、ドーリア式の服（Doric chiton）、イオニア式の服（Ionic chiton）、ヒマチオン（Himation）、ショールなどがあり、ドーリア式の服の布地は毛で着られる大きさに織り出されていた。布地の縁には単純な色のクラビス（Clavus）がついていて長方形の一枚の布地をピンやフィブールなどでとめていた。実質的かつ活動的でひだの美しさやその動きの美しさが表わされていた。イオニア式の服の布地は麻で、腕に沿って前後の布を沢山の留金でとめた。これは後年になると、ボタンや縫いつけたりしている。柔らかい麻が身体にふれて優美であり、芸術的で繊細な感覚をもっていた。着付けは、紐やリボンを蝶結びにして整え、服装の上部の縁には織込みか別布で細い飾りをつけていた。そしてドーリア式の服よりプリーツが多いので豊かで華やかにみえた。このようにギリシャの服装は結える紐やリボンが着付に重要であったために、紐やリボンそのものは単純で細いのが一般的であったが、ときにはいくらか広くて長く垂らして使用し、飾りの意味としたものもあった。

また布地の色は上流の人々のものは白であり、下層階級は茶色か灰色のものが多かった。服の上にはヒマチオンという外套のようなものをまとった。これは長方形のラシャの布を身体に巻きつけるものでありその色はさまざまで、青、ばら色、紫系統の色、白、黒などや縁に色のバンドを織り出したり刺繍をした。ギリシャの婦人たちは家に閉じこもっているのが慣わしであったから刺繍などの手芸に長けていて好みのままの装飾を自分たちの手でするのを楽しみにした。いわゆる裁縫に念を入れるということも服装そのものの性質上必要がなかったのも、おのずから純手芸的な仕事を楽しんだわけである。



図7 ドーリア式の服を着た婦人たち
(壺絵より)



図8 イオニア式の服を着た婦人(壺絵[帯を結ぶ女]より)

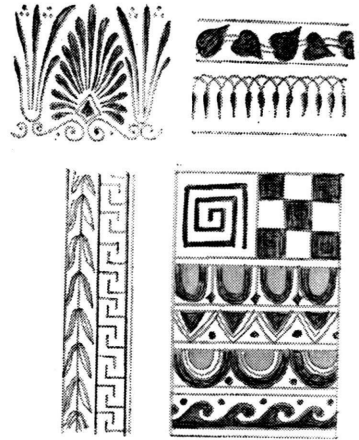


図9 ギリシャのモチーフ

図7はドーリア式の服を着た婦人たちで布地は毛が普通で、布地の縁には単純な色のクラビスがついていた。ドーリア式の服が紐(または帯)のしめ方によってどのように変化するかを示したものである。

図8は小さなプリーツがつけられたイオニア式の服である。プリーツを強調して作ったものである。

図9はギリシャのモチーフである。ギリシャのモチーフの中で雷紋や絡縄紋は織物その他の縁飾りにさかんに使われ、月桂樹やアンテミオン、アカントス、樅の葉などの模様化したものは装飾や布地の刺繍などに応用された。

ローマ帝国は、紀元前約700年頃建設され、ギリシャの芸術や文化の影響をうけた。ローマの服装は、ギリシャの服装をそのままとり入れたものであり、3世紀のはじめにキリスト教が一般に認められてキリスト教時代のものになるまで約600年の間、変化がなく、服装そのものは変らなかったがよび名が異った。すなわちギリシャのイオニア式の服をストーラ (Stola)、ヒマチオンをパラ (Palla) とよんだ。また染色技術が発達し、色は職階の表示に用いられるようになり服装は非常に華麗で形式は変化に富み、色は広範囲に用いられた。男女の服装に区別が付きはじめたのは共和政なかば頃からで、パラを好んで用いるようになり、布地はラシャや麻、絹などで、色は赤、黄、紫、青などさまざまであった。が一般に淡色で絹地に金糸で刺繍されたものなどもあり、ストーラは無地もののほかに美しい刺繍をしたものもあった。チュニックは女子のものは足首までの長さで細いクラビスが、えりぐり、そで口、すそ、前身頃、わきなどについていた。クラビスはローマ服のただ一つの飾りである。ローマ



図10 ローマ婦人の服装

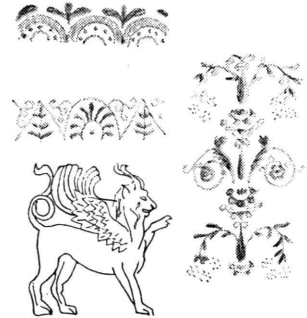


図11 ローマのモチーフ

の婦人の服装の布地は 毛か毛と絹の交織、または 麻と絹の交織が多く用いられ、絹は中国よりシルク・ロードを通してアッシリアやペルシャ地方を経ながら織物として、また未加工のまま入ってきた。未加工の布はごく薄地に織られて用いられた。こうした技術がギリシャからローマへ伝えられ服装は一段と華美になった。

図10はローマ婦人の服装でストーラの上にパラを着ていた。パラの布端はクラビスで飾られている。

図11はローマのモチーフである。ローマのモチーフは、すいかずら、アカントス、月桂樹、オリーブや渦巻唐草紋様などがある。これらは建築の装飾や服装の端や縁飾り、装飾品などにも用いられた。

3 初期キリスト教時代とビザンチン（西暦 300 年から 1450 年まで）

ローマ帝国がおとろえ人々の生活が困窮していた頃、キリスト教の訪れは人々に光明をもたらした。ダルマチア地方からキリスト教が入って来てその地方の服装が喜んで着られるようになった。この服装をダルマチカ (Dalmatica) といった。このようにキリスト教は人々の精神を支配し文化を左右するようになったわけである。思想が新しくなると服装も変っていったが、4世紀のはじめ(312年)、キリスト教がローマで国教として認められてからダルマチカが宗教的な雰囲気をもって普及していった。キリスト教を信じる人々の服装は素朴で質素で布地が少なくてよく着方も単純であったが、ビザンチンではだんだんと華麗なものになっていった。飾りとしてはクラビスがあげられる。身頃の前後やそで口などに赤や紫のクラビスが用いられたが、これは身分の高い人々だけのものであり、ダルマチカの流行により単なる飾りとなってしまった。色もまた赤や紫とはかぎらなくなり、クラビスは刺繍のものや別布を縫いつけたり織り出されていた。布地はラシャが大部分でのちに麻や木綿も使用し貴族のために、絹と麻の交織もあった。服装にはパリウムや外套なども使用されていたが、女子はベェルが必需品となった。また身分の高い婦人がダルマチカの上に元のパラを着たがこれをパリウム (Pallium) と呼んだ。パリウムは実用的にならなかったのも身分の高いということを象徴するためのものになり、布地は普通無地であったが、クラビスをつけたり全面に柄をつけた装飾的な布地のものもあった。外套は実用的なものになり旅行者や雨天の時などに男女やあらゆる階級の人々に着られ、ベェルは大小の長方形で布地は絹、毛、麻や木綿を用い色はさまざまであり、無地やクラビスのあるものが普通であったが金糸の刺繍や房飾りなどによって装飾されているものもあった。

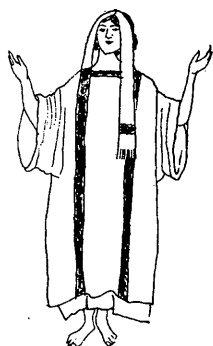


図12 ダルマチカを着た婦人

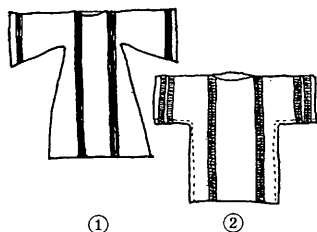


図13 ダルマチカの形

図12はダルマチカを着た婦人で、首の出る穴とそで口、すそが開いていてその他は縫いつけられている。飾りとしてクラビスが用いられ、図のものは帯をしめないまま着用した。

図13はダルマチカの形を示したものである。①は初期のもので②はその後のものである。①は直線裁ちで幅広いそで口がついていた。が②になると身体の線になぞらえた裁断がなされるようになり、そで口、胴のクラビスが目立つ。

476年、西ローマ帝国がゲルマン人によって亡ぼされたが、東ローマ帝国（のちのビザンチン帝国）はあまり影響を受けなかったで新しい文化の中心地となって栄えた。ビザンチンの服装はキリスト教による神権崇拜による荘厳味と威光とが特徴である。またその中に、ビザンチン文化を形成した諸要素を見い出すことが出来る。もとギリシャの植民地であったため、あらゆる面でギリシャ的であったがアジアに隣接していたために、東洋の影響もおおかった。荘厳味は光沢のある織物やきらびやかな装飾品の色や感触によって表わされていた。一つのまとまったものというよりも光り輝やくものが集まったもので造型的な美よりも魅惑的な華麗さがあった。これらは豪華な服飾への欲求や宗教的な感情などによりなされたものである。6世紀、中国より蚕が入って来たので絹織物の発達や東洋より高価な真珠や宝石などが入ってきて服飾に豊富に使用され、また金銀糸による錦織りや紋織物などが一層にぎやかになった。また刺繍技術も進んだ。古い頃の綴織は経には麻糸、緯には模様染にされた羊毛糸が用いられ、さらに模様の部分に白の絹糸で刺繍がなされた。

（3世紀頃にはすでに生糸による刺繍がなされていた。）6世紀になると経緯とも絹糸で模様が織り出された絹紋織物が現われ、8世紀～10世紀頃にかけて最も盛んになった。これらはさらに色糸の刺繍がほどこされ古い頃のもののはランニング・ステッチ（Running Stitch）やサティン・ステッチなどで刺繍されているが次第に複雑なものが加わっていった。また一方では荘厳味を表わすために高価な毛皮が服装の縁飾りや裏地に使用された。このようにビザンチンは西洋服飾史上とくに贅沢な時代として知られている。

ビザンチン時代の服装は三つに分けることが出来る。一つは教会を飾っているモザイクに見られるキリストと諸聖人がまとっている聖人の服装（ダルマチカと外套）、次に、司教や僧が宗教儀式の際に着用した儀式用の宗教服（ダルマチカと上祭服）、最後にビザンチウムの宮廷で着用された服装（ラヴェンナのモザイク画のジュピター皇帝とテオドラ皇后とその侍女たちの服装）とである。このようにビザンチン調は特に貴族服にのみ特徴が表われており、庶民は単調なダルマチカとベュールが多く、色調も地味で布地も実用的なものであった。



図14 ビザンチンのテオドラ皇后像
（モザイク画より、6世紀）



図15 ビザンチン末期頃の
中流婦人

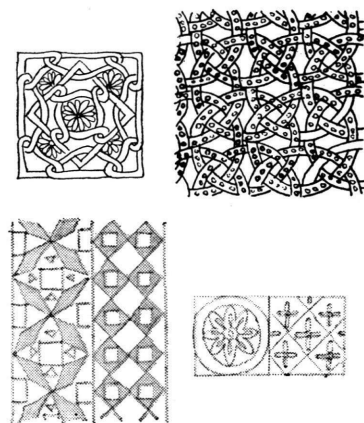


図16 ビザンチンのモチーフ

図14はビザンチンのテオドラ皇后の盛装で、ストーラは純白の絹地で、すそやそで口が黄金とエメラルドで装飾され、その上に紫色のパルダメントウム（Paludamentum）を着ている。すそは表裏とも金糸で装飾され、またえり元は宝石入りの豪華なえり飾りが用いられ、右肩のブローチや帽

子、胸元も宝石で飾られている。髪には宝石入りの頭飾りをのせ、靴も濃厚な色の柔いなめし皮で宝石や刺繍、真珠などで飾られていた。

図15はビザンチン末期頃の中流婦人で着用している服はこの頃（10～12世紀）のダルマチカで、そでの肘から先が急に広がりそでの途中に飾りがある。伝承的なクラビスが無くなり首廻りとそで口、すそ廻りとに単純なボーダー（Border）を付けている。

図16はビザンチンのモチーフで、古代オリエントのものが多いが、それが幾何学的に模様化されさらに絵で美しく組合される特色があり、これらの模様が紋織にされ、または絹糸が金銀糸で豪華緻密に刺繍し、あるいは真珠、宝石で装飾されたりした絹織物は、豊麗な色調と眩光を放った。

結 論

服装史を学ぶと、服装の歴史が政治・経済・芸術などを通して考察され、各々時代・地方・民族によっても異なり、また人間の飾りたいという欲望の強いこと、そして常に新しいものを求め続けていることなどの一端を識ることが出来る。現在盛んに活用されている手芸的装飾は、すでに紀元前 3000 年前から伝えられ親しまれていることが判る。

次に僅かではあるが拾いあげてみた手芸的装飾のあらわれとその時代を概観して見ると、

エジプトや西方アジアでは紀元前 3000 年より 500 年頃までの間に、刺繍、房飾り、プリーツ、飾り紐（または飾り帯）、布を蝶結び（ボウ）にする、装飾品（宝石・金銀細工などのあしらひ）、布の縁飾りなどが単純な服装に効果的に施された。併し、エジプト人は伝統を重んじ保守的であったため、芸術や服飾もあまり変化発達を遂げなかった。

ギリシャおよびローマでは紀元前 700 年より西暦 500 年頃までの間に刺繍、クラビス（布の縁飾りでとくにこのようにいった）、ドレープ、飾り紐（または飾り帯）、リボンの蝶結び（ボウ）が使われた。この頃には次第に布の染織技術が発達し、ギリシャおよびローマの婦人達によってこれらの布にあしらう純手芸的な服飾がとくに目立った。しかしローマではクラビスだけが唯一の飾りとして用いられていた。

初期キリスト教時代とビザンチンでは西暦 300 年より 1450 年頃までの間には刺繍、クラビス、房飾りが主に使われ、クラビスは次第にすたれてボーダーに変わった。しかしこの時代には織物技術（絹織物・紋織物）が非常に発達し、色彩も豊富で色糸、白糸、金銀糸刺繍が真珠、宝石類のあしらひと共に豪華、けんらんに施された。特に贅沢な時代であったので服飾品の使用が目立っている。

手芸的装飾が古代からどのように生まれ、変化発達してきたか。この問題を服装史の中からとりあげてゆくことは中々困難であることが判った。即ち多くの諸先輩によって服装史の研究は立派になされているが、その中に取り入れられた手芸的装飾（とくに技法など）については特に詳細に述べられたものが比較的少ないので、今後はこの点についても研究を続けていきたいと考えている。

この原稿は枚数の関係上、詳細に述べたいところも割愛せざるを得ない状態で甚だ残念であった。

終りに、本研究に対しご指導、ご協力を賜りました本学服飾美術学科長宮下孝雄教授に深く感謝の意を表し、併せて今後のご指導をお願い申し上げます次第です。（なおこの論文は、昭和40年11月26日第1回東京都私立短期大学研究発表会で発表したものの一部を含みます。）

参 考 文 献

- Wilcox, R. Turner; The mode in costume
The mode in hats and headdress
Tilke, Max; A pictorial history of costume
Houston, M. G; Ancient Egyptian, Mesopotamian and Persian costume and decoration
Bradshaw, A; World costumes
服装の歴史 ヘニー・ハラルド・ハンセン著 原口理恵・近藤等共訳
西洋服飾発達史 古代・中世編 丹野郁著
文化服装講座 服装史編 今和次郎・江馬務共著
女性服装史 今和次郎著
服装研究 今和次郎著
世界服飾史要 江馬務著
図解西欧服飾史 長尾みのる著
服飾の歴史 パスカル・セッセ著 日向あき子訳
西洋服装史入門 飯塚信雄著
西洋被服文化史 元井能著
裁断図よりみた西洋服装史 青木英夫・大橋信一郎共著
新しい目でみた服装史 青木英夫・志賀信夫共著
衣裳論 エリック・ギル著 増野正衛訳
東京家政大学研究紀要 第1集 尾中明代・斎藤茂
服飾手芸 杉野芳子・北爪巳代子共著
造形講座 服装と生活 河出書房
バイエル教則本 イルゼ・ブラッシー著
デザインハンドブック 宮下孝雄著
被服美学 宮下孝雄著
服飾事典 田中千代著
被服大事典 被服文化協会編
洋裁手芸事典 家政教育社